

氏名	高橋 臨太郎
ヨミガナ	タカハシ リンタロウ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第689号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文）「象る」制作論 （作品）Scale here

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	中村 政人
（論文第1副査）	東京工業大学	教授		伊藤 亜紗
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	西村 雄輔
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	杉戸 洋

（論文内容の要旨）

私の制作は場所との結びつきから始まる。足裏が接している地面、この素朴だが、確かな実感を生む接触がなければ制作の動機や、表現への欲望が生まれない。わたしは、地に接することで裏返ってくる、どうしようもなくそこにあるわたしの身体を感覚する。

そして他に触発された瞬発的な身体の反応や、変容する音を「聞く」ことでわたし自身を象っている。本論文は、自身の身体感覚を起点としてパフォーマンス、映像、立体などの美術作品を制作する筆者の制作論である。その中でも、対象を「象る（かたどる）」ことの働きについて焦点を当て論じるものである。端的にいうと、私は作品制作において異なるもの同士の接触が生む未分化な感覚を象る。私たちは異なるものに出会うと何か言い表せない感覚を持つだろう。それにあたる適当な言葉や概念が見つからない場合、それに変わる何かを手さぐりに探す。それは接触した対象、それをとりまく環境や状況に見出される。それは身体と密接に関係した記号過程であり、あたかも触れたり、受け渡したり、時には手にした途端に消えてしまったり、触れるたび形状が変化していくような生き生きとした記号である。その働きの中で、お互いは相互に象り合い、そしてだんだんとそれぞれの内面になじみのある形に生成される。それは次第に私たちがよく知る、記号、言語、象徴として身体と切り離され、初めからあったかのように汎用化される。しかしそれらが元々は他との出会いで生じた未分化な感覚からきているはずであることは次第に見えなくなる。私が目指し象ろうとするのは、その接触の瞬間であり、双方がぎこちなく緊張し、焦点の定まらない、手付かずの瞬間を「象る」ことを目的としている。私の作品の多くは、そんな不可分な感覚を、わたしの身体の荒々しい歪みを「聞く」ことを通していかに象っていくのかを制作としている。私の制作は、私の身体を機軸に、様々な場所や状況に入り込んでいく。機織り工場や、高速道路、ダム湖など、何かと何かの狭間で結界の緊張感を持った非人間的な辺境に一つの「音」として介入していく。私とその境界を逡巡し、行き来することを通して分断していたものたちが重なりあう。

第一章では身体における接触が起こす意識の現れが、どのように象るといふ働きに関係してくるのかを論じる。哲学者ミシェル・セールの「混合体」の概念をそのヒントとして論じる。彼はその著書「五感」の中で、「中指で、私は自分の片方の唇に触れる。この接触の中に意識は住まっている。」（『五感』p24.）と記している。一つの身体の中でも、触れるものと、触れられるものに振り分けられ、その触れ方によって、主体と客体が交互にいれ変わる。この接触による主客の往還のなかに初めて意識が生じることになる。私はこれを異なるもの同士の接触にも固有の意識は生じるのではないかと解釈した。それは入り出すことのできる一つの自由な「場」として象られる。

そして、わたしの制作の原点となる、素朴な接触を引き起こした具体的な地面や、空間、ものなどの媒質を皮膚として拡張し、紐解きながら作品化していく経緯を語る。第二章では、「聞く」ことに焦点を当て

て論じる。具体的な場所へ「演奏」を通し介入し、前節で触れた接触における主客の反転や混じり合いなどが、「聞く」わたしと、「弾く」わたしの重なり合いを通して象られていく制作過程を論じる。

出展作品でもある「Scale Here」は首都高速道路を走行するトラックの荷台で筆者が都市のリズムとともにドラムを演奏した実践の記録である。半透明のホロに囲われた荷台の中では、通り過ぎる街灯の点滅や、突き上げてくる路面の凸凹、左右からの遠心力などの抽象化された都市が入り込んでくる。都市に対して、弱々しく客体にもなれないわたしが映し出されるが、そうなることで初めて都市との間に生じるグローヴについて記述していく。

第三章では、わたしの原初の記憶を巡る。幼少期に阿蘇山の麓での乗馬をした記憶だ。自身の身体もうまく扱えない当時の私は、世界の見方、接触の仕方を知らなかったであろう。その馬は大きな背中に私を乗せ、優しく揺らしながら自らが見ている視点を私に垣間見せてくれた。それは世界と私とのまだ曖昧だった境界の間にもう一つ焦点を与え、私に重ね合わさるようにして象ったのだ。言い換えれば、一つの世界の見方へと私を導いた。その経験の中に対象を「象る」ことの核心部分をみる。

わたしと異なるものや事象との接触を契機として、その過程の中で関係を媒介するいくつものものとわたしとの結節点を結び直し、その中に身を浸していく。このようにしてわたしの作品において「象る」という作用は、捉えきれない事象をわたし自身や他者に開くことによって、それに模倣的に「なる」のではなくその一部を「なす」ことを可能にする。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、身体感覚を起点にパフォーマンス、映像、立体などの表現活動を行なってきた高橋臨太郎氏が、自身の作品および制作のプロセスを、「象る(かたどる)」という動詞を手がかりに分析したものである。「象る」とは、「私と対象の分けられなさ」を前提としてうえで、その未分化な状態からかろうじて形がうまれてくるさまをすくいとり行う行為である。氏は、高速道路、活火山、ダム湖など、私たちを圧倒するようなスケールの対象からの「呼びかけ」に恐る恐る身をひらきながら、自身の身体とその対象との出会いを象り、作品化していく。

第一章は、高滝湖を舞台にした作品「west side riding “bonus truck44”」(2018)などを取り上げ、対象と出会う最初の難所としての「接触」を分析している。氏にとって接触は、偶然に満ちた危機的な瞬間であり、自身の脆弱さをむしろ保ちながら即興的に反応していくプロセスである。

第二章は、高速道路を走る車の荷台でドラムを叩く作品「Scale hier」(2019)を取り上げ、「演奏」という行為に焦点をあてる。無機物である巨大な高速道路とセッションする経験は、拡張と没入の感覚をもたらす。その結果、通常のスケールの更新が起これ、この新たなスケールが次なる行為の指針になっていく。

第三章は、京丹後市の機織り工場を舞台とする「Mezzo Scracher」(2019)などを取り上げ、土地の歴史や人との出会いに触発されて作品が実現したプロセスを詳述した。綿密な調査にもとづき、対象の時間的・空間的大きさと自身の身体の「溝」を自覚しながら、それに近づいていく。

終章は、氏の身体の来歴をたどるようにして、最初の記憶である乗馬の経験およびそれにもとづく作品「オトリスのマラカス」(2020)を分析した。

以上の議論を通じて、高橋氏は、「接触」という出来事がもつ、主/客が容易に反転しうる不安定さをねばりづよく見つけ、それを「象る」という大変魅力的な言葉を用いて分析することに成功している。よって審査の結果、合格と判断した。

(作品審査結果の要旨)

高橋臨太郎の博士審査作品は、これまでに制作した作品数点をまとめて展示したものである。作品は主に高橋の行なってきたパフォーマンスの記録と、関連するインスタレーションとなった。高橋の作品制作行

為は、地球の表面を象るような動きである。高橋が取るのは、あたかもその場にコンセントを差し、アナログな手段で場と接続するような方法である。たとえば「Scale hier」では道路をトラックで移動しながら演奏し道の表面をなぞるような行為であり、対象に自身の身体で触れ、また自身が即興的に奏でる音で触れ、撫でるような行為である。対象は場であり、環境である。環境はいわゆる自然であったり絶え間なく動く都市空間であったり、「Mezzo Scracher」では丹後の織機が稼働する音と共にある人の営みのさなかであったり、それらの場に自らを置き、そこに留まってははいないような行為で場に接続することで、曖昧な対象と自らの間に関係をつくり、両者の間を象ろうとする。

作品「オトリスのマラカス」は、高橋がごく幼少期に父に抱かれ乗った馬から見た阿蘇の景色の経験が、高橋の世界の見方をつくる原点となったことから、作られた作品である。高橋は記憶の中の馬を形作り、それをマラカスとした。それを振るには両手で抱え上げなければならないほどの大きさである。本人は自らの世界の見方の原点を与えられた地点と意識する阿蘇の地に赴き、馬のマラカスを振る。その行為は、その場に何を与えるかというよりやはり高橋本人を再び象ったのではないだろうか。「象る」行為はここで、世界と高橋の間を象るが、同時に高橋自身を強く象ったはずである。そこにはプロセスをさらに重ね、作品を深化させうる可能性がある。そうして変化していくであろう高橋本人が、また再び世界を象り、自らをも象ることを継続しながら、よりその行為を深め象ることが世界に新たな視点をもたらすことを期待しつつ、高橋の制作行為が課程博士学位に相応しいものとして高く評価する。

(総合審査結果の要旨)

本論の「象る」という概念に次のように作者は論考している。『象るのは場のはっきりとした輪郭を外から捉えることではない。場の中で移ろいゆく主体のありかを他者との接触点に発見することだ。そこで私はできるだけ自分自身を透明な存在に向かわせているように思える。なぜなら、私の内的な感情、一元的な視点を押し付けるような一方的なやりとりをなるべくしないように、私という人称を一旦保留し、対象に「なる」のではなく、対象の一部を「なす」ことを通して、内側から対象を紐解き、わたしとの結節点を結び直すことで象ることを目的にしているからだ。』例えば、タップダンスを高速道路の料金所で行う映像作品においては、作者の靴の裏と地面がこすれる音を生み出す事で高速道路を走る車の環境音と協奏するように「象る」行為を行っている。また、織物工場の機械とその仕組みを使ってサウンドライブパフォーマンスを行い、その織物機を使ったノイズ音を織物の繊維の組むデザインに変換し「象る」プロセスを生み出している

「Scale Here」に置いては、ホロ付の軽トラの荷台にドラムを積み、作者がドラムを叩きながら首都高速道路を走り回るというパフォーマンス映像作品を作成している。

『私はこの都市が持つ無意識のリズムを呼び起こし、それを身体で押し返すように鼓面を叩いていく。不規則に揺られるホロの中で演奏する私の身体の脆弱さは強調されることとなり、リズムはずれてしばしばアクセントは意図していないところに打たれる。レコードの針のように路面を擦るトラックのタイヤから伝わる振動、それを増幅させる私の身体、全てが地続きに接触している。その演奏プロセスは、私と都市の二項対立のように見える構図の中に、瞬間瞬間に立ち上がり消えていく数えきれない様々な接点の存在を感じさせるだろう』つまり首都高を走りトドラムを叩く作者との無数の接点とがそのグループ感作者の「象る」表現となっている。

「象る」という表現プロセスを考察した論文、多くの実証的研究制作活動を通して生まれた作品において審査員一同、高い評価で博士課程合格とした。

今後、世界のアートシーンにおいての活動が期待される。